第１学年２組国語科学習指導案

（男子１５名、女子１１名、計２６名）
指導者　小村彩香
支援員　高島里美

１　教材名　わたしの　たからもの（本時６/８時）

２　教材の目標
①たからものについて話したり、その話を聞いたりしようとする。＜国語への関心・意欲・態度＞
②たからものを決定し、声の大きさ、話す速さに気を付け、順序よく相手に伝わるように話す。
＜話す・聞く能力＞
③長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」「へ」及び「を」を文の中で正しく使うことができる。　＜言語についての知識・理解・技能＞

３　教材について
（１）　教材観
本教材は指導要領における「Ａ話すこと・聞くこと　相手に応じ、身近なことなどについて事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを落とさないように聞く能力、話題に沿って話し合う能力を身につけさせるとともに、進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。」及び、「話すことに関する指導事項（イ）相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気をつけて話すこと。（ウ）姿勢や口形、声の大きさや速さになどに注意して、はっきりした発音で話すこと。」の内容にあたるものである。また言語活動「(エ）知らせたいことなどについて身近な人に紹介したり、それを聞いたりすること。」を通して、これらの指導事項を指導していくものである。
１年生ではこれまで「A 話すこと・聞くこと」の内容で「ともだちと　はなしましょう」という教材を学んだ。これは主述の整った文型で友達とペアで話す活動を取り入れたものである。この教材の教科書の話型に「よしおさんの　たからものは　なんですか。」「ぼくの　たからものはくるまのほんです。」というものがあった。教科書の話型を見本に、子どもたちが自分の宝物について話す様子は、とても生き生きして、友達との会話を楽しんでいた。本教材は自分の宝物をテーマとし、実物を持ちながら話をするという活動を教材を貫く言語活動としているので、前教材「ともだちと　はなしましょう」より一層、自分の大切なものを相手に知らせたいという意欲をもち続けながら、学習に向かうことができ、自分から表現したくなる教材であろう。
第１次では、子どもたちに教材の見通しをもたせる。教師がまず自分の宝物を見せ、紹介のスピーチを行うことで基本文型を提示するとともに、子どもたちの学習意欲を高める。宝物が大きかったり、持ち出せなかったりする子どもたちのために絵や写真を見せながらの例も紹介する。自分の紹介したい宝物が決まった際には、学級便りを通して家から宝物の実物や写真を学校に持たせてもらいたいことを伝え、保護者に協力をお願いする。
第２次では、発表原稿を作る。子どもたちは発表原稿を作ることが初めてであるので、発表原稿の元になる発表メモを作ることから始める。この際、「宝物は何か」「いつもらったか」「宝物の好きなところ」「どうして大切なのか」という観点が書かれたワークシートを用いる。発表メモのワークシートは、話す順序を考えて発表原稿を作りやすいように、観点ごとに切り分け短冊にする。またこれらの観点で足りない子どもたちもいると考えられるので、白紙の短冊を用意する。
第３次では、発表会に向けての学習を進める。まずは、これまでに作った発表原稿をもとにペアで交互に話し手、聞き手と役割を替えて練習をする。２回以上話し、話すことに慣れ、子どもたちが自信をもてるようにしたい。第６時となる本時では、３～４人の生活班で練習をする。クラス全体で行う発表会を意識するために、適切な声の大きさで話しているか、相手に伝わる速さで話しているか、わかりやすく話すための工夫をしているかという３つの観点で、他者評価をする。そして、第７時・第８時で「たからもの　はっぴょうかい」を行う。前時にもらったアドバイスを生かして発表することができたかなど、発表の感想を交流し、学習を振り返りたい。

（２）指導計画及び評価計画

小教材		観点	具体目標	評価の手段
第１次 ２時間	第１時	関心・意欲・態度	・学習の見通しをもち、宝物を紹介する意欲をもつ。	活動観察・発言
	第２時	関心・意欲・態度	・自分の紹介したい宝物を一つ選ぶ。	ワークシート・発言
第２次 ２時間	第３時	言語についての知識・理解・技能	・自分の宝物について、どんなことを友達に伝えるのかを考えて、発表メモをワークシートに書く。	ワークシート・発言
	第４時	言語についての知識・理解・技能	・友達に紹介することを意識して、発表メモをもとに発表原稿を書く。	発表原稿・記録
第３次 ４時間	第５時	話す・聞く能力	・話し方のポイントを理解し、相手意識をもって話す。	ワークシート・発言
	第６時 (本時)	話す・聞く能力	・発表会を意識し、相手に伝わるように話す。	ワークシート・活動観察
	第７時 第８時	話す・聞く能力	・自分の宝物を順序立てて説明する。 ・質問されたことを受けてわかりやすく答える。	活動観察・記録

４　本時の指導

（１）本時の目標

「わたしの　たからもの」について、相手に伝わるように話すポイントを知った子どもたちが、グループで話を聞き合い、評価する活動を通して、相手により伝わるように話すことができる。

（２）授業構想

本時までに、子どもたちは自分の宝物について相手にわかりやすい順序で書いた発表原稿をもとに、ペアで話す活動をしてきた。本教材を貫く言語活動が、「たからものはっぴょうかいをひらこう」であり、この活動は次時に行う。本時は、発表会を意識し、話が相手により伝わるための話し方について学びを深める。

「つかむ・見通す」段階では、前時までに学習した上手な話し方を再確認する。子どもたちの学習への意欲を損なわないよう、話し方に関する発言であれば積極的に認め、褒めるようにしたい。子どもたちから出た意見から、本時は相手に聞こえる声の大きさ、相手に聞こえる速さで話すこと、わかりやすく話すための工夫をすることをめあてに活動することを告げる。

「追求する」段階では、３ー４人の生活班になり、発表の練習を進める。宝物の実物を用意すると、そちらに意識が向いてしまうと考えられるので、実物に代わるサンプルを各班に配布し、それを持って説明するようにする。全員が発表をし、お互いの発表をチェックシートを用いて、評価し合う。評価項目は①声の大きさ、②話す速さ、③伝えるための工夫である。３つの評価項目に対し「とてもよい」「よい」「もうすこし」の３段階評価から選んで〇印をする。発表が終わったら、「大きい声でとてもよかったよ。」「もうすこしゆっくり話すといいよ。」など、一声かけながらチェックシートを渡すようにする。みんなの前で話すことに自信がない A さんには教師や支援員がついて温かい言葉掛けをし、少しでも自信をもって言えるようにしたい。友達の話を聞いていて、質問をしたい場合は、質問しても良いこととする。

「まとめる」段階では、振り返りシートを用いて本時の学習を振り返る。相手に聞こえる声の大きさで話せたか、相手に伝わる速さで話せたか、伝えるための工夫ができたかを「とてもよい」「よい」「もうすこし」の３段階評価から選んで〇印をする。また友達の発表で良かったところや発表会でがんばりたいことを書き、全体で交流して次時につなげたい。

（３）本時の視点（手だて２授業実践　　ー表現力を育むための手だてー）

小グループ化の位置づけ

班の中で発表し合い、評価し合うことが、相手にわかりやすく伝えるために有効であったか。

第２学年３組国語科学習指導案

（男子１４名、女子１６名、計３２名）

指導者　小澤　初江

１　教材名　こんなものがほしいなあ　　（本時　３／９時）

２　教材の目標

①「こんなものがほしいなあ」という思いを相手に伝えたいという意欲を持って、主体的に学習に取り組もうとする。　＜国語への関心・意欲・態度＞

②知らせたいことが相手によく伝わるように、大事なことを落とさず、順序よく話すことができる。話し手の思いや願いに共感しながら聞き、感想を持つことができる。　＜話す・聞く能力＞

③文の中における主語と述語の関係に注意して、相手に分かりやすく話すための構成メモを書くことができる。　＜言語についての知識・理解・技能＞

３　教材について

（１）教材観

本教材は、学習指導要領第１学年及び第２学年の「話すこと・聞くこと」の指導事項（ア）身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと。（イ）相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。（ウ）姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。（エ）大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと、及び言語活動例（ア）想像したことなどを文章に書くこと、（エ）紹介したいことをメモにまとめたり、文章に書いたりすること、さらに「書くこと」の指導事項（ア）経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること、（イ）自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること、を受けた内容となっている。

子どもたちは、２年生になってから「メモのとり方」でメモの作り方、取り方を学び、「お手つだいをしているよ」においては、「はじめに」「つぎに」「さい後に」を使って簡単な構成を考えて、順序立てて話すことや五感を働かせた表現を使って詳しく話すことを学習してきた。個個のメモの作成においては短冊メモや付箋を使い、箇条書きを練習し、それらのメモを並べ替えたり、つけたしていったりすることで、自分の伝えたいことをまとめる練習を行った。発表の仕方を考える場面では、「友達に伝えるための工夫」を技能という観点と相手を思う気持ちという観点で確かめ合うために小グループでの活動を取り入れた。国語科での活動を生かし、生活科の学区探検の学習では自分の伝えたい地域のことや遊び場のことを発表しあった。こうした活動を通して、みんなでお互いの知りたいことを出し合ったり、聞きあったりすれば、自分の分からないことやうまくまとめられないことも何とか形にしたり、言葉にしていくことができるという思いが育ってきている。

本教材は自分の欲しいものをプレゼンテーションするというゴールに向けて、メモを作り、発表の仕方を学ぶ活動である。

第一次においては、自分の困っていることや苦手に思っていること、あれば便利だなと思っているものから、「こんなものがほしいなあ」と想像しイメージをふくらませる。ここでは、本当にあったらいいのにな、と子どもたちの思うものを見つけられるかということが意欲につながるので、個々の興味を把握しておきたい。そうした「ほしいものの」イメージを友達との交流の中で具体的に言葉にしていく。また、表現することに不安を感じる子どもにはグループでの意見交流が大きなヒントになっていくと思われる。

まとまったイメージは、第二次での活動（発表のためのメモ作り）につなげ、個々の作業を行っていく。文章の構成はひな型を提示し、苦手な子どもも初めのメモから発表のための説明用原稿を作成できるよう支援していく。発表までにグループでの練習を行い、付箋メモで質問やアドバイスを出し合う。そうしたグループでの交流活動を生かした発表にしていきたい。

（２）指導計画及び評価計画

小　単　元		観　　点	具　体　目　標	評価の手段
第１次 ３時間	第1時 第２時 第３時 （本時）	関心・意欲・態度 話す・聞く能力	・学習の展開に見通しを持ち、自分の「こんなものがほしいなあ」というものを見つける。 ・自分の欲しいものを決め、絵で表す。 ・自分の欲しいものを友達と説明しあったり、感想やアドバイスを伝えあったりする。	・活動観察 ・発言 ・活動観察 ・ワークシート
第２次 ４時間	第４時 第５時 第６時 第７時	関心・意欲・態度 話す・聞く能力 言語についての 知識・理解・技能 話す・聞く能力	・「こんなものがほしいなあ」をどのように伝えればよいか必要な事柄、順序を考える。 ・自分の「ほしいもの」がどのようなものなのか分かるように発表メモを書く。 ・発表メモをもとに、発表練習をグループで行い、友達のアドバイスを参考にして発表メモを見直す。	・活動観察 ・発言 ・活動観察 ・ワークシート ・活動観察 ・ワークシート
第３次 ２時間	第８時 第９時	話す・聞く能力 書く	・発表会を行い、友達に内容がよく伝わるように話し方を意識して発表する。 ・発表を終えての感想を書く。	・活動観察 ・ワークシート

４　本時の指導

（１）本時の目標

自分の「こんなものがほしいなあ」を決め、漠然としたイメージで絵に表現しメモを書いていた子が、小グループになり友達に言葉で説明をしたり、友達からの質問やアドバイスを受けたりすることにより、さらに具体的な欲しいもののイメージを持つことができる。

（２）授業構想

第１時において、子どもたちは日頃、困ったことや苦手なことがあった時「あったらいいなあ」と思う道具について、それぞれイメージを持つ。それは、複数あったり、ドラえもんの四次元ポケットから出てくる道具によく似ていたりすることも考えられる。しかし、この学習活動の最後には、学年でプレゼンテーションを行うということをあらかじめ伝えてあるので、どのようなものかを説明するために、自分の持っているイメージをわかりやすい説明に整理していく必要がある。

本時においては、まだ、「ほしいもの」が決定していていなかった子どもが、「こういうものがほしい」と言える時間としたい。そのために、発言しやすい生活班をもとにした小グループになり、友達に説明をする。説明の仕方は、①自分の欲しいものの名前②なぜそれが欲しいのか③使い方、というような順で話す。説明の後に、友達から「何で欲しいの」「何に使えるの」「どういうときに使えるの」「どうやって使うの」「使うとどんないいことがあるの」と、説明不足だったことに関する質問を受ける。友達からの質問にすぐに答えられない子どももいると予想されるので、質問に答えられない場合は、「後で考えて付け足します。」「アドバイスをください。」などという言い方で場をつなげていくこともあらかじめ教えておく。　聞き手側には、「それはあるといいね。」「便利だね。」「いいものを思いついたね。」というよい点を伝えることも大切であると声かけをし、話し手が自己肯定感を持てるようにしたい。

「こういう考えもあるよ。」というようなアドバイスや、友達の説明の中から新しいイメージがわいたりすることも期待できる。友達との関わりの中で、はじめは漠然としたイメージしかなかったものが、言葉にしていくことでより具体的なものになっていくと予想される。子どもたちが自分の考えがまとまっていくに従って自信をつけ、発表会に向けてのメモ作りや発表練習に意欲を持って取り組むことを期待している。

（３）本時の視点　（　手だて２授業実践　　～表現力を育むための手だて～　）

小グループ化の位置づけ

生活班で自由に意見交流を行うことは、自分の考えが深まり、具体的なイメージを持つための有効な手段であったか。

第３学年２組　算数科学習指導案

（男子１３名、女子１６名、計２９名）
指導者　中村　龍

１　単元名　「三角形」　　（本時　８／１４時）

２　単元の目標
図形についての観察や構成などの活動を通して、図形を構成する要素に着目し、図形について理解する。

３　単元について
（１）単元構想
本学級の子どもたちは、３年生らしくとても元気が良い。朝の挨拶や授業の始まりの挨拶など、大きな声で気持ち良くできる。授業中は、わからない言葉があるといろいろな子どもがよく質問する。好奇心旺盛で「知りたい」という意欲にあふれている。
しかし、学習内容を追求する気持ちには差がある。興味の上で「知りたい」気持ちはあるのだが、そこから内容を「理解」し、生活と関連づけて「思考」する姿はあまり見られない。そのような様子から、どの教科でも考える時間を多めに設定し、知り得た内容をより深めることの楽しさを感じることができるように進めている。
算数の授業については、「好きだ」「おもしろい」と感じている子どもが多い。その理由の中には、算数が得意で「問題を解くことがおもしろい」という意見もあるが、難しい課題について「考える過程が楽しい」という意見もある。それらの子どもは、容易な問題を解く活動より、手応えのある問題の方が集中して取り組んでいる。しかし、問題を解くことはできるが、理解したことを説明する活動については、消極的な子どももいる。そこで、それらの子どもが自信をもって取り組めるように、説明する活動を行うときには、隣同士で説明しあうことから始め、数名のグループへと広げるような段階をふんできた。
図形の学習については、計算問題よりも興味をもって取り組む子どもが多い。具体物を使って行うような算数的活動は、子どもの意欲をかき立てるようである。１学期に行った「円」の学習では、コンパスを使って円をかくことを楽しみ、模様を作る課題では夢中になって取り組む姿が見られた。しかし、半径や直径の定義や性質などを、理解したり説明したりすることは、まだ十分とは言えない。本単元では、具体物を使用しながら子どもたちの理解を深め、説明する力を育てていくようにする。
また、３年生では、研修テーマである表現力をはぐくむ手だてとして、ホワイトボードを活用している。口では恥ずかしくて言えない子どもも、ホワイトボードを使用することで、恥ずかしがらずに自分の意見を書くことができる。最初は書くことに躊躇していた子どもも、回数を重ねていくうちにだんだん書くことができるようになってきた。また、自分の考えをホワイトボードに書くことで、頭の中にある内容を整理し、分かりやすい説明ができるようになってきている。発表するときや周りと意見交換をするときにも、自分の考えを見せるツールとなり、言葉だけで説明するよりもわかりやすいと子どもたちも感じている。

本単元では、三角形について考えていく。１年生から積み重ねてきたことをもとに、辺の長さに着目して二等辺三角形や正三角形について理解していく。レディネステストを行ったところ、辺や頂点などの名前については理解している（96 %）。しかし、「長方形はどんな形なのか」、「正方形はどんな形なのか」など形の概念については、正確に理解している子どもは少ない（24 %）。そのような実態から、円の学習でも半径や直径などを、言葉で説明するような取り組みを多くしてきた。本単元でも用語を適切に用いて説明できるように留意し、授業を進めていく。
第一次「二等辺三角形と正三角形」では、自分たちでストローを使っていろいろな三角形を作り、それを自分の考えで仲間分けしていく。そうすることで、三角形の種類について漠然と捉えていた子どもたちが、辺の長さに着目し、２辺や３辺が等しい三角形があると気づくだろう。円でも具体操作を行ってきたが、本単元でも視覚だけではなく、作った三角形を実際に動かしたり、裏返したりしながら学習できるようにしていく。また、話し合い活動をより活発に行えるように、名称や定義をしっかり押さえ、基礎の定着を図っていきたい。
第二次「三角形のかき方」では、それぞれの三角形の特徴を理解した上で、コンパスや定規などの道具を用いた作図の仕方を考える。道具を正確に使う技能が求められるが、繰り返し練習をすることで技能を高めていく。また、技能の習得だけでは終わらずに、三角形や円の性質を復習しながら、どうしてそのかき方で二等辺三角形や正三角形がかけるのか、理解できるようにしていく。その際にも、小グループで意見交換をしながら考えを確立していくように、授業を展開していく。
第三次「三角形と角」では、２年生で学習した「かど」という概念をもとに、図形の構成要素としての角や、その大きさについても理解していくようにする。二等辺三角形や正三角形の角の大きさについても、等しい大きさが二つだと二等辺三角形であるとか、全部等しい三角形は正三角形であるなど、折り紙を用いて角を合わせる活動を通して、より理解を深めていくようにする。

第四次「もよう作り」では、合同な三角形を平面上に敷き詰めて模様作りを行う。まだ、内角の和や合同などは、学習していないので、ここでは等しい形でもいろいろな模様ができる楽しさを感じられる程度にするが、これが次年度の図形学習へとつながるものにしたい。

（２）指導計画及び評価計画

小　単　元		観　　点	具　体　目　標	評価の手段
第１次 ５時間	二等辺三角形と正三角形	関心･意欲･態度 思考 思考 知識・理解 知識・理解	・いろいろな長さのストローを組み合わせていろいろな三角形を作る。 ・辺の長さの違いに着目し、三角形を分類する方法を考える。 ・２つの分類方法で、それぞれ３つの集合を作り、結果が同じになることについて考える。 ・二等辺三角形の定義や性質を理解する。 ・正三角形の定義や性質を理解する。	活動観察 活動観察・記録・発言 記録・発言
第２次 ４時間 本時	三角形のかき方	知識・理解 技能 知識・理解 技能 思考 関心･意欲･態度	・辺の長さが指定された二等辺三角形をコンパスを使ってかく。 ・正三角形も二等辺三角形と同じ方法でかけることを知り、かく。 **・二等辺三角形や正三角形を折り紙で作りどうして二等辺三角形や正三角形ができたのか、定義をもとに考える。** ・正三角形を使って、正四面体、正八面体のさいころを作る。	記録・発言 活動観察・記録 活動観察
第３次 ２時間	三角形と角	知識・理解 知識・理解	・角の定義と、角・頂点・辺・角の大きさの用語を理解する。 ・三角形の３つの角を紙に写し取って角の大きさを比べ、二等辺三角形や正三角形の角の特徴を理解する。	活動観察・記録 記録・発言
第４次 １時間	もよう作り	関心･意欲･態度	・同じ大きさの二等辺三角形や正三角形を敷き詰めて、いろいろな模様を作る。	活動観察・記録
第５次 １時間	れんしゅう		・既習事項の理解を深める。	
第６次 １時間	力だめし		・既習事項の確かめをする。	

４　本時の指導

（１）本時の目標

二等辺三角形・正三角形の定義やかき方を学習した子どもが、定規やコンパスを使用せずに、試行錯誤しながら折り紙で正三角形を作ったり、友達と考えを伝え合ったりする活動を通して、どうして正三角形ができるか定義をもとにして考える。

（２）授業構想

本時の学習では、まず基本となる二等辺三角形・正三角形の定義を復習する。本時は、その定義をもとにして正三角形の作り方を考えることになるので、最初に押さえておく。説明するときには、黒板に画用紙で作った図形を提示し、言葉だけでなく図形を見ながら確認できるようにする。確認した内容は黒板に掲示しておき、正三角形をどうやって作ればよいか迷ったとき、いつでもその定義へ戻れるようにしたい。

確認が終わったら折り紙を配布し、それを使って二等辺三角形を作ることを説明する。早く作りたくて気持ちが高ぶることが予想されるが、はさみを使用する活動なので落ち着いて行うようにする。折り方については、教科書に載っているやり方で行うが、教科書は見せずに、折り方についても考える時間を作る。

最初は、折り紙を長方形の形に折るところまで提示し、そこからどのようにすれば二等辺三角形ができるか考える。はさみで切るときには、切る方向を間違えてしまうと、二等辺三角形にならずにばらばらになってしまうおそれがある。そこで、切る場所に線を引き、確かめてから切るようにする。切った後は、できた形が本当に二等辺三角形かどうか確認をする。しかし、そのときも定規やコンパスを使用せず、確かめるように言う。そうすることで、辺と辺を折って合わせれば長さを確かめられることに気づき、次の正三角形を作るときの手がかりとなるだろう。

二等辺三角形であることを確かめたら、なぜ二等辺三角形ができたか質問をする。折り紙を半分に折り、辺を重ねて切ったので、重ねた場所が等しい長さになるということは、長さを確かめたときに気づくと思われる。発表するときは、子どもが作った二等辺三角形を使って、どの辺の長さが等しいかを見せながら説明する。説明するときには、「等しい」や「辺」などの用語を適切に使って言えるように留意する。発表を聞いている子どもも、自分で作った三角形の２辺を合わせ、定規を使わなくても二等辺三角形ができることを確認する。

つぎに、正三角形を作ることを話す。折り紙を折って簡単に二等辺三角形ができたことから、「正三角形も簡単にできる」「早く作りたい」という思いが膨らんでいるだろう。

最初は、個人で考えていく。子どもたちは、どうやって折れば正三角形になるか、いろいろと試したいはずである。二等辺三角形で折った折り方を手がかりに考えていく子どももいれば、自分なりの折り方を見つけようと、違う折り方で進める子どももいるだろう。

二等辺三角形の折り方をもとに考えている子どもには、下の辺が左右の辺と同じになるような、折り方を見つけられるように支援していく。また、二等辺三角形を作るときに、偶然正三角形ができてしまった子どももいるかもしれないが、何回作っても正三角形になる折り方を探すように言う。

自分なりの折り方で考えている子どもが行き詰ってしまったときは、折り紙が正方形なので、４辺の長さが等しいことに着目させる。そして、正方形の４辺の内３つを使えば正三角形になるという見通しをもたせ、折ることで辺が移動できることに気づかせたい。

しばらくは個々の様子を見守り、隣同士で話し合う時間を取る。意見を出し合うことで、自分だけでは思いつかない折り方や、考え方に気づき、正三角形の折り方を見つけていくことを期待したい。そして、隣同士の話し合いを経て、班での話し合いに移る。

正三角形の折り方を見つけた子どもには、そのやり方をみんなの前で発表してもらう。発表を聞く子どもは、その折り方を見ながら一緒に折っていく。全員が自分の折り紙で正三角形を作り、その折り方で本当に正三角形ができたか辺を合わせて確かめる。

そして、どうしてその折り方で正三角形ができたか説明する。二等辺三角形の折り方をもとに考えた子どもは、１辺とほかの２辺をあわせることで、３辺が等しくなったことを説明できるように支援していく。また、もうひとつの折り方では、折ることで正方形の辺が移動して正三角形になったので、３辺の長さが等しいことを説明できるように支援していく。

最後に、本時の内容をまとめ、本時の学習について振り返り、分かったこと・難しかったこと・おもしろかったこと・不思議に思ったことなどを視点に「算数日記」を書き、学習を終わる。

（３）本時の視点　（手だて２授業実践　～表現力を育むための手だて～）

表現したくなるような場の設定 　折り紙を折って、正三角形を作る活動が、正三角形の定義を用いて説明をしたくなる場として適切であったか。

小グループ化の位置づけ 　隣同士や班で説明し合う活動が、折り方を考えたり、わかりやすく説明したりする手だてとして、有効であったか。

第４学年２組　算数科学習指導案

（男子１１名、女子１９名、計３０名）

指導者　佐藤倫彦

１　単元名　　面　積　（本時　５／１０時）

２　単元の目標

面積について単位と測定の意味を理解し、面積を計算によって求めることができる。

３　単元について

（１）単元構想

今回の学習指導要領改訂では、「算数的活動を通して」という文言を目標のはじめに位置付けている。この部分が、目標の全体にかかっているという基本的な構造については、これまでの学習指導要領における目標と同様である。

算数的活動とは、児童が目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動を意味している。ここで「目的意識をもって主体的に取り組む」とは、新たな性質や考え方を見いだそうとしたり、具体的な課題を通して、数量や図形の意味を実感をもってとらえたり、思考力、判断力、表現力等を高めたりできるようにするとともに、算数を学ぶことの楽しさや意義を実感できることである。

本単元では、１つ目として、算数的活動（１）の（イ）の活動であり、図形についての見方を用いて正方形や長方形の面積の公式を活用すれば、より簡単に面積が求められることを実感させることをねらいとしている。さらに、既習事項をもとに、筋道を立てて説明しようとする態度を育てることもねらいとしている。

２つ目として、算数的活動（１）の（ウ）の活動であり、面積を求めたり、様々な場面で単位を用いたりすることを通して、実感を伴って単位の大きさを理解したり、面積の求め方をより確実に理解したりすることをねらいとしている。身の回りにある正方形や長方形の面積を実際に調べる活動（折り紙、教科書やノートの面、机の面、教室の床など）子どもの実態に合わせて目的意識をもって、面積の学習が日常生活に役立つものであると実感させるようにしたい。

子どもたちは、これまでに、長さ・かさ・重さの学習を通して，量の概念や大きさの数値化、測定の基礎を学んできている。また、色板を用いて図形を構成する活動、長方形や正方形、二等辺三角形などの平面図形を敷き詰める活動を通して、「広さ」の概念の基礎となる学習をしてきている。こうした経験をふまえて、本単元では、面積についてその単位と測定の意味を理解し、長方形及び正方形の面積の求め方について考え、これらを用いて面積を求めることができるようにすることをねらいとしている。

子どもたちは、「広い」という言葉を日常のいろいろな場面で使っている。しかし、児童たちがとらえている「広さ」の意味は、「広い道」のように幅を表したり、「広い空」のように空間を表したりしていて、必ずしも面積を指していないことがある。また、面積の大きさに関しては、周りの長さと面積の大きさが同じととらえたり、形により面積の大小を決定したりと、広さに対する概念は曖昧である。

そこで、本単元では、図形の周りの長さ、形にも着目しながら考え、操作活動や段階をおった測定活動を通して面積の概念を確かなものとしたい。まず、身の回りの具体物を測定する直接比較から始め、間接比較をする中で、普遍単位の必要性と有用性を認識させたい。さらに、単位をもとに数値化したり、公式を使って計算する方法を理解したりすることで面積の概念を習得させていきたい。

「１　面積」では、広さを比較することを通して，面積の意味と測定の意味について理解できるようにすることをねらいとしている。まず、直接比較から始め、ブロックの区切りを１辺とした正方形の数による数値化で、面積の概念の掘り起こしをする。そして、１辺１ｃｍの正方形（１ｃ㎡）を数えることを手がかりとして面積を調べる。また、同じ面積で形の違うものをかく活動を通して、面積は切っても動かしても変わらないことを理解できるように支援する。

「２　長方形と正方形の面積」では、長方形、正方形の面積は単位面積のいくつ分であるかを手際よく見つける方法を公式にまとめる学習から、長方形、正方形の面積は縦と横の辺の長さを用いた計算によって求められることを理解できるように支援する。１ｃ㎡の正方形を敷き詰めることによる数値化であるが、実際に敷き詰めていくよりも、思考実験的な扱いで、きちんと正方形に並んだ数の数え上げ方と乗法を関連させて、求積公式を導き出していけるようにしたい。そして、どこでどのように使うのかを十分に工夫する活動を取り入れ、繰り返し使い慣れることを通して、正しく公式を用いることができるようにしたい。

「３　大きな面積の単位」では、面積の単位㎡、ａ、ｈａ、ｋ㎡や面積の単位の関係を理解できるようにすることをねらいとしている。まず、㎡を扱い、必要感を大切にしながら、ａとｈａの単位を導入し、ｋ㎡も併せて使える単位として扱う。単位は、その相互の関係をきちんとつかんでいることが大切であるが、２次元の世界であるだけに、換算は大変である。単位面積の正方形の関係から、想像する力と考える力を使って単位換算ができるようにすることが重要である。

４年２組の子どもは、素直であり、とても元気である。今年度は、あいさつ推進校ということもあり、あいさつに力を入れており、朝や帰りのあいさつ、授業の始まりや終わりのあいさつ等、気もちよく行うことができようになってきた。また，自己肯定感を育むことを目指して、自分自身をほめる（認める）ことや友だちのよさをほめる活動を４月から行ってきた。自分自身をほめることや周りの友だちに認められることで、自分に自信をもつことができるようにもなってきた。男女の仲もよく、休み時間には、運動場で学級のみんなで遊んでいることがほとんどである。

学習に対しても、意欲的であり、課題に対しても何とか自分で解決しようと取り組む子が多い。算数の学習においては、自分の考えを友だちに分かりやすく伝えることを意識させながら学習を進めてきた。本単元でも、【課題の提示　→　個人学習（自分で考える）→　かかわりによる学び合い（ペア・グループ・全体）→　個人学習（学習の振り返り）】という一連の学習の流れを大切にし、自分の考えをしっかりもつこと、かかわりによる学び合いで考えを広める・深めることを意識して取り組んでいきたい。自分の考えをしっかりともつために時間を確保したり、支援が必要な児童には教師が寄り添って考えを引き出したりして、個に応じた支援をしていきたい。学びの段階として、全体で話し合う前にペア学習を取り入れる。そうすることで、全体の前ではなかなか発言できない子も、必ず説明する場が設けられる。その中で、質問し合ったり、アドバイスし合ったりする活動を取り入れながら自分の考えを深めることができるようにしていきたい。

（２）指導計画及び評価計画

小　単　元		観　　点	具　体　目　標	評価の手段
第１次 面積 (2)	長方形や正方形の花壇の広さ比べをして広さを数で表す方法を考える。	【関・意・態】 【考え方】	・広さに関心をもち、比べ方を考えようとしている。 ・長さや重さでの比べ方の方法を生かして数値化して比べる方法を考えている。	・活動 ・発表 ・ノート （ワークシート）
	面積の単位ｃ㎡を知り、単位面積をもとにして面積を求める。	【考え方】 【知識・理解】	・長方形や正方形以外の形にも面積があることを知り、同じ面積の図形をいろいろ考える。 ・面積も長さやかさと同じように、単位のいくつ分かで表せることを理解する。	・活動 ・発表 ・ノート （ワークシート）
第２次 長方形と正方形の面積 (3)	長方形の面積の求め方を考える。	【考え方】	・長方形と正方形の面積の求め方を考え、求積公式の意味が分かる。	・活動・発表 ・ノート
	必要な辺の長さを測り取って、面積を求める。	【技能】	・　必要な辺の長さを測り、求積公式を適切に用いて長方形や正方形の面積を求めたり、求積公式を利用して辺の長さを求めることができる。	・活動 ・発表 ・ノート
	複合図形の面積を求める方法を考える。 （本時）	**【関・意・態】 【考え方】**	**・複合図形の面積の求め方を進んで考えている。 ・長方形や正方形を組み合わせた複合図形の面積の求め方を考える。**	**・活動 ・発表 ・ワークシート**
第３次 大きな面積の単位 (4)	面積の単位㎡が分かる。	【知識・理解】	・１㎡＝１００００ｃ㎡の関係が分かる。	・活動・発表 ・ノート
	面積の単位ａを知る。面積の単位ｈａを知る。	【知識・理解】	・ａとｈａの関係を理解する。	・活動 ・発表 ・ノート
	単位ｋ㎡を知り、ｋ㎡を使って面積を求める。	【技能】	・ｃ㎡、㎡、ａ、ｈａ、ｋ㎡の単位の関係を知り、面積を求める。	・活動 ・発表 ・ノート
	面積と単位の関係の理解を深める。	【知識・理解】	・身の回りのもののおおよその広さを単位面積をもとにしてイメージし、㎡、ａ、ｈａ、ｋ㎡の相互関係が分かる。	・活動 ・発表 ・ワークシート
第４次 (1)	力だめし		・既習事項の理解を深める。	

４　本時の指導

（１）本時の目標

長方形、正方形の面積の求め方は知っているが、複合図形を見て、どのように面積を求めればよいか考えている子どもたちが、複合図形を分解したり、合成したりすることで、長方形や正方形に分けられることができ、そこから、和や差を使って求める活動を通して、長方形や正方形を組み合わせた複合図形の面積の求め方を考えることができる。

（２）授業構想

本時は、複合図形の面積の求め方を考える学習である。

「つかむ」「見通す」では、本時の課題を提示する。提示をするとき、課題を少しずつ見せるようにする。はじめは長方形の形が見えているが、次第に複合図形になり、子どもたちの心は揺さぶられるであろう。課題となる複合図形には、目盛りや長さを提示しない。どのように考えれば、面積を求めることができるのかを考えるように声かけをしていく。既習事項を生かして考えていくことができるようにすることで、子どもたちの課題解決への意欲を高めていきたい。これから学習する内容に関して、既習事項を活用することを意識することも伝えていきたい。

求める方法に見通しがついたら、「追求する」では、複合図形に補助線を引いたり、実際に複合図形を切って考えたりして求める方法を考える活動に入る。あとで、自分の求め方を友だちに説明することができるように、ワークシートに記入することを伝える。自力解決が難しいＡさん・Ｂさん・Ｃさんには、具体物を与えて、図形を長方形に分割する操作をすることで、解決にイメージがもてるようにしていく。今までの学習の様子から、図形を２つの長方形に分けて求める子が多いと予想される。１つの方法を考えることができた子には、別の方法を考えたり、友だちの考えを聞いたりすることができるようにする。そのためにワークシートを多めに用意する。隣同士のペア活動では、ワークシートを活用して、友だちに自分の考えを分かるように伝えたり、友だちの考えを聞いたりする活動を行いたい。何となく分かるが自分の考えを伝えることに不安をもつ、Ａさん・Ｂさん・Ｃさんなどは、机間支援の中で声をかけ、自信をもって自分の考えを友だちに伝えたり、発表したりすることができるようにしたい。また、共通点や相違点を見つけ、自分の考えと比べるようにし、お互いの考えを認め合う活動を行うことで、次の全体の場で自信をもって発表することができるようにつなげていきたい。また、いろいろな考えがあることに気づくようにしていきたい。

「まとめる」では、全体で複合図形の求め方について発表し合う。友だちの発表を聞き、いろいろな考えを認め合い、いろいろな求め方があることに気づき、全体で１つ１つを確認していく。その中で、同じような考えはどれかを全体で話し合い、複合図形の面積は、長方形や正方形にし、その面積の和や差で求められるということをまとめていきたい。子どもたちはきっと、自分が考えた求め方で面積を求めてみたいという気もちをもつと予想される。その意欲を大切にし、提示した学習課題にマス目の書いてあるシートを重ね、長さが分かるようにし、長方形や正方形の面積の公式を使って、面積を求める。

最後に、学習カードを記入し、がんばったことや分かったこと、友だちとのかかわりについてなど具体的に書くことができるように声をかけていき、本時の授業を終わりとする。

※本時の授業の中で、算数的活動については、
　１つ目として、発展的・応用的に考える活動として、複合図形について図形を分割したり、合成したり、空白部分を補充したりして面積を求める活動を行う。その際に補助線をひいたり、線をかき加えたりする。
　２つ目として、説明する活動として、どのように複合図形の面積を求めたか、友だちに自分の考えが伝わるように図を用いながら説明することができる。

（３）本時の視点　（　手だて２授業実践　　～表現力を育むための手だて～　）

小グループ化の位置づけ
ペア活動で説明し合ったことは、「伝える力を培うため」「考えを深めるため」に役立っていたか。

表現したくなるような場の設定
　お互いのよさを認め合い、自分の考えに自信をもち、表現したくなるのに効果的であったか。

　ワークシートの提示の仕方は、自分と同じ考え方をもつ子がいることで自信もち、表現したくなったり、他の友だちの考え方が分かったことを表現したくなったりするのに効果的であったか。

第５学年２組外国語活動指導案

（男子 21 名、女子 16 名、計 37 名）
活動場所　外国語ルーム
指導者　HRT　濱道　早紀
JTE　渡邉　靖乃

１　単元名　　Lesson7　What's this?　（４/４）

２　単元の目標

What's this?　It's a ~.などの表現を使った活動を通して、日本語と英語の共通点や相違点から、言葉のおもしろさに気付き、ある物が何かと尋ねたり、答えたりしようとする表現に慣れ親しみながら、積極的に友達とコミュニケーションを図ろうとする。

３　単元について

（１）単元構想

クラスの子どもたちは、男女問わず仲が良く活発な子が多いので、普段から意欲的に様々な活動に取り組んでいる。５年生になり、週１回英語に触れられるという環境がとても新鮮なようで、外国語活動への意欲が旺盛で、外国語を使ったゲームやチャンツに楽しみながら取り組む子が多く見られる。英会話スクールや英語塾に通う子は数名いるが、それ以外は日常的な英語活動の経験が少ない。そのため、英語のみの説明を理解したり、簡単な英語で表現したりすることはできないが、絵カードやジェスチャーなどからALTの言っていることを分かろうと努力する子も多い。

その一方、間違えるのが恥ずかしいと感じ、自信がもてずに手を挙げられない子も少なくない。また、ALTとコミュニケーションをとることや，英語を発音することに対して抵抗のある子も若干名見られる。

そこで、外国語活動をはじめ普段の学習の中で、「間違えてもいいんだよ」という雰囲気作りを大切にして授業を行っている。また、ボランティアとしてチャンツなどの際に、自分から進んで前に出て表現する場を設定し、言い慣れ活動を多く取り入れている。初めは自信がなかった子も、１度前に出てやってみることで、その後自信をもって大きな声で表現することができている。

本単元は、What's this?　It's a ～.などの表現に慣れ親しむ活動と、それらの表現を用いたクイズを行う活動を通して、友達とコミュニケーションを図る楽しさを体験する単元である。

始めのうちは言い慣れていないために、意欲的に活動を楽しむことができていなかった子ども達も、回数を重ねていくうちに、英語での表現に慣れ、様々なクイズやチャンツの活動に意欲をもって取り組むことができるようになると考える。そこで、本単元でも、第１時から第３時までに様々なクイズを通して、語彙を増やし、What's this?　It's a ～.などの表現に慣れ親しんでいく。第１時から第３時までの経験を用いて、自分でオリジナルのクイズを作りヒントを考え、第４時のクイズ大会では､自信をもって積極的に英語を用いて､友達とコミュニケーションをとるようにしたい。

また、漢字クイズは、英語だけではなく漢字も扱うことから、漢字の表現方法と英語の表現方法との比較などを通して、子ども達が異文化や言語に関心を高めるのにも適した内容である。

さらに、本単元の最後に行うクイズ大会では、自分で作ったクイズを使用する。自分で作ることで、「相手に伝えたい」「自分のクイズに答えてもらいたい」という意欲をもち、活動に取り組むことができると考える。

本単元を通して、自分が作った愛着のあるクイズを使って、積極的に友達とコミュニケーションを図ろうとする姿を期待する。また、クイズの答えが分からなかったり、単語が分からなかったりしても、Hint, please.と尋ねたり、ジェスチャーなどを使って、相手に伝えたりしようという態度を養って欲しい。

（２）指導計画及び評価計画

	目標	内容	使用表現	評価		
				関	慣	気
第１時	様々なものの言い方から、言葉の面白さに気づくとともに、身の回りの語に慣れ親しむ。	①【Let's Listen】 「口の中は何か、考えよう。」 ②【Let's Play】 「ポインティングゲーム」 ③【Let's Chant】"What's this?"	What's this? It's a piano. cat, mat, cap, tomato, guitar, apple, baseball		○	○
第２時	あるものが何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	①【Let's Chant】"What's this?" ②【Activity】「クイズ大会をしよう」 ・シルエットクイズ ・漢字クイズ ・パズルクイズ ・スリーヒントクイズ	What's this? It's a ~.		○	
第３時	あるものが何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	①【Let's Chant】"What's this?" ・ジェスチャークイズ ・背中の絵は何？ ・クイズ大会をしよう！	What's this? It's a ~.		○	
第４時（本時）	積極的にあるものが何かを尋ねたり答えたりしようとする。	①【Let's Chant】"What's this?" ・クイズ大会をしよう！	What's this? It's a ~.	○		

４　本時の指導

（１）本時の目標

「マイクイズを発表し、進んで友達のクイズに答えよう」という課題に対して、表現の言い回しに自信がなかったり、さらに相手に伝わるように表現したいと感じていたりする子どもたちが、What's this?　It's a ～. という表現を使って、チャンツやゲーム、クイズ大会で発表をする経験を通して、積極的にある物が何かを尋ねたり答えたりしようとする。

（２）授業構想

まず、挨拶、チャンツをし、楽しく外国語活動をしようという雰囲気作りをする。

始めの挨拶では、既習事項である、How are you? I'm fine.など、体の調子を答える挨拶を行い、表情やジェスチャーも意識しながら、授業に入っていきたい。

次のチャンツでは、バナナチャンツで色々な単語を確認した後、歌に合わせて、本時の主題である What's this? It's a~.の表現を、難易度の異なる２種類のチャンツで確認する。まだ What's this? It's a ~.の表現に苦手意識をもっている子も簡単なチャンツから授業に入ることで自信をもって取り組むことができ、少し難易度の高いチャンツを次にすることで、さらに意欲を引き出すことができるであろうと考えた。また、What's this?のチャンツは、出題側と解答者側に分かれて活動をし、途中で交代をする。その後ボランティアで、数人の子が前に出て、残りの子どもが出題側、ボランティアの子どもが解答側となり、チャンツを行う。

その後、本時の主題である、「マイクイズを発表し、進んで友達のクイズに答えよう」に入る。まず、JTE と HRT がデモンストレーションをし、ルールや注意点などを説明する。また、授業の最後に頑張っていた友達のよかった所を発表する時間を設けるので、どのようなところを見たらよいか、（声の大きさや表情、ジェスチャーを使ってヒントを出していた、ヒントが連想しやすい言葉だった）などの視点を明確に伝える。

デモンストレーション､ルールの確認をした後それぞれのグループに分かれてクイズ大会をする。

今回のクイズ大会では、人前で表現をすることが苦手なＡさんやＢさんが自信をもって積極的に活動に取り組むことができるように、５～６人×７グループに別れ、それぞれ自分の考えたクイ

ズ（シルエットクイズ、漢字クイズ、３ヒントクイズ、パズルクイズ、ジェスチャークイズなど）を出題することとした。

また、子どもの「出題したい」という思いを大切にしたいので、難しい単語でも積極的に使用し答える時には日本語で答えても良いこととする。但し、It's a ~.という表現は必ず使うようにする。

少人数のグループに分かれたときに､子どもたちだけでクイズ大会を進めることができるように、ヒントの出し方やクイズの答え方などを前時までにしっかりと確認をしておく。

答えが分かったら I know.と言いながら手を挙げ、It's ~.　と答えるが、解答者を指名するときには、分かる子ばかりがクイズに答えてしまい、クイズの答えが分からない子が置いてきぼりになってしまわないように、I know.と手を挙げる子が４人出たら指名をする。また、答えが分からない子は Hint, please.と言うルールを定着させる。このとき、いつも分からずに手を挙げられない子もいることが予想されるので、始めのうちは、HRT や JTE が一緒に入り、Hint, please.と言うことにより、分からないときの Hint, please.を言いやすい雰囲気作りをする。

ヒントを出す出題者は、ヒントは予め用意しておいた（色、形、大きさ、動物）などの特徴を It's a ~.という表現を使って答える。ジェスチャーを使ってヒントを伝えても良いとし、ヒントを出すときや答えを言う際に、大きな声で言えていたり、ジェスチャーを使って伝えたりしようとしている子を大いに褒め、活動に対する意欲を高めていく。

HRT と JTE は、英語での表現が苦手な子のそばに行き、フォローをして回る。

教室の前と後ろにクイズのシナリオや必要な表現を、子どもから見える場所に掲示し、スムーズにクイズ大会が行われるようにする。

少人数のグループでクイズ大会をし、もっと多くの友達に伝えたいという気持ちをもった子どもの意欲をさらに高めるために、グループごとに発表した中で、難しい問題や、おもしろかったクイズをいくつか選び、全体で発表する

このとき、同じグループだった子は、答えが分かっているので、先に答えを言わないように予め注意しておく。

本時のまとめとして、友達の良かった点を発表し、認め合いの場を作るために、振り返りの時間は十分にとるようにする。

一人一人が活動における互いのがんばりについて振り返っていく中で、コミュニケーションの仕方やコミュニケーションの内容、相手のよさへの気づきを全体に広め、「英語を使ってやりとりするのは楽しいな」「次回はこんなふうにしてみたい」「相手のことをもっと知りたいな」という意欲を高めることにつなげたい。

今日の活動の目標を確認し、(聞き取ろうとしたか、伝えようとしたか）自分の姿と照らし合わせながら、振り返りカードに記入する。大体の子どもが振り返りカードを書き終わったら、最後に終わりの挨拶をし、本時の授業を終了する。

（３）本時の視点（手だて２授業実践　～表現力を育むための手だて～）

小グループ化の位置づけ
５～６人のグループに分かれてクイズ大会をし、全員に発表の機会を与えたことが、自信をもって表現できる場となっていたか。

表現したくなるような場の設定
自分でクイズを作ったことが、より意欲を高めることにつながっていたか。

第６学年３組　外国語活動指導案

（男子１４名、女子１３名、計２７名）
活動場所　第二音楽室
HRT　杉本　傳
ALT　三須　ミルナ

１　単元名　オリジナルの劇をつくろう　（本時５／６）

２　単元の目標
英語の劇の創作活動を通して、英語で表現することの楽しさに気づき、場面に合ったセリフやジェスチャーを考え、積極的に英語で劇の内容を伝えようとする。

３　単元について
（1）　単元構想
子どもたちは、好奇心旺盛で元気がよく、様々なことに楽しさを感じながら、学校生活を過ごしてきた。男女の仲も良く、また、小グループで核となるような子も比較的多くいることから、子どもたちが主体となって、学校行事や学級活動も行ってきた。人前で表現することを好む子どもも見られ、表現力に富んだ子も数多く見られる。
外国語活動では、楽しい雰囲気のもと、授業を行ってきている。生き生きと取り組む子が進んで前に出てくることにより、よい手本となり、他の子の活動を促している。しかし一方で、様々な動詞の表現が出てきて難度が増したり、一人ひとりが発表する場になったりすると消極的な態度になってしまう子も見られる。
本単元では、このような子どもたちの実態から、グループで英語のオリジナルの劇をつくる活動を取り入れた。劇は、これまでに外国語活動の授業で扱った表現を用いてつくっていく。子どもたちにとってオリジナルの劇をつくることは、興味を引き立てられることであり、友だちが楽しんでもらえるような劇をつくろうと意欲が掻き立てられるものであると考える。また、劇をすることは、単に英語表現を口から声に出すだけではなく、相手意識をもち、ジェスチャーや表情を用いながら、より実際場面に近いコミュニケーションを体験することができる。加えて、これまでの使用表現を活用し、自分たちでコミュニケーションをとるためのセリフを考えていくことは、実践的な能力をつけることにつながっていくことと考える。
オリジナル劇は、テーマを We are good friends とした。本研修の「温かな人間関係づくりを基盤とした表現力を育む授業」に関連づけてはみたが、子どもたちの自由な発想を尊重して、つくっていくようにする。メンバーは４人、もしくは５人のグループとし、一人ひとりに必ずセリフをもつこととする。劇をつくる手順として、まずテーマとこれまでに扱った表現をもとにイメージ・マップ・シートを作成する。これまでに扱った表現は、子どもたちがすぐに確認できるよう、「English Note」にまとめておく。また、それらの表現が、英語ノートや Hi friends の中で、どのような場面設定のもと使用されていたのかも確認していく。思い浮かばないグループには、最初のセリフや場面設定などを与え、そこから広げていくように声かけをし、イメージ・マップ・シート作成の支援をしていく。作成したイメージ・マップ・シートからあらすじを考え、英語のセリフを作っていく。英語のセリフは、これまでに扱った表現を使うことを基本とするが、知りたい英単語などは和英辞典を使い、調べるよう働きかける。また、あらすじを伝えるためには、セリフだけではなく、ジェスチャーや表情も効果が大きいことを取り組む中で感じられるようにしていく。HRT と ALT は、適宜グループの話し合いに参加し、支援していく。最後には、学年で劇を発表し合う場を設け、子どもたちの意欲の高まり、持続を図る。
本単元の多くの活動は、グループのメンバーを中心とした活動となる。そのため、グループは修学旅行の班とした。修学旅行の班は、編成する際、子どもたちの希望をもとに班を編成したため、仲がよく、普段の生活、授業の中でもかかわりの良さが見られる。
また、振り返りはグループで読み合うことにする。一人ひとりが振り返りカードを書き、それをグループの冊子に張っていく。輪番制でグループの一人がコメントを書き、振り返りカードはグループ内で回し読みをする。同じグループのメンバーがどんなことを考え、どんなところに不安を感じているかな

どを共有していく。また「English News」と題した学級通信も読み合う。この通信には、劇をする上で有効なジェスチャーや声の大きさなどに気付いた振り返りやグループ内で励まし合えた振り返りを載せ、子どもの良い気づき、あらわれを全体に広げていく。振り返りカードの活用や「English News」などの取組を通しても、自他の良さ、共につくり出す喜び、学び合うことの楽しさを感じて欲しい。

本単元を通して、自分の思いや考え、気持ちを伝えることができるようになることを願う。また、コミュニケーションの場において、どのように伝えればいいのか分からないから、何もしないのではなく、伝わるかどうか不安な気持ちがありながらも、自分自身の能力を最大限に発揮し、コミュニケーションを積極的に図ろうとする姿勢をもてる子どもに育ってほしい。

（2） 指導計画及び評価計画

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th rowspan="2">目標</th><th rowspan="2">内容</th><th rowspan="2">使用表現</th><th colspan="3">評価</th></tr>
<tr><th>関</th><th>慣</th><th>気</th></tr>
<tr><td>第一時</td><td>英語の劇に興味をもち、あらすじを理解しようと聞いている。</td><td>【Let’s Chant】
【Let’s Listen】
先生たちの作った英語の劇を楽しもう。
【復習】
これまでに扱った表現の復習をしよう。</td><td rowspan="6">Hello.
My name is ~.
Nice to meet you.
How are you ?
I’m happy.
I like ~.
Do you like ~ ?
Yes , I do.
No , I don’t.
Thank you.
Do you have ~ ?
~ , please.
What do you want ?
What’s this ?
It’s ~ .
I teach ~ .
I study ~ .
What would you like ?
I’d like ~ .
When is your birthday ?
My birthday is ~ .
I can ~ .
Can you ~ ?
Who am I ?
Turn right.
Let’s go to ~ .</td><td></td><td></td><td>○</td></tr>
<tr><td>第二時</td><td>これまでに扱った表現をもとに、オリジナル劇のあらすじを考える。</td><td>【Let’s Chant】
【Activity】
オリジナル劇のあらすじを考えよう。</td><td>○</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第三時</td><td>これまでに扱った表現をもとに、オリジナル劇のセリフを考える。</td><td>【Let’s Chant】
【Activity】
オリジナル劇のセリフを考えよう。</td><td>○</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第四時</td><td>劇の練習を通して、英語表現を聞いたり、伝えたりしている。</td><td>【Let’s Chant】
【Activity】
劇の練習をしよう。</td><td>○</td><td>○</td><td></td></tr>
<tr><td>第五時(本時)</td><td>よりわかりやすく伝えるための表現方法に気づくと共に、表現することのおもしろさを感じ、よりよい劇を目指し、積極的に伝えようとする。</td><td>【Let’s Chant】
【Activity】
劇を見合おう。
劇を改善しよう。</td><td>○</td><td></td><td>○</td></tr>
<tr><td>第六時</td><td>英語の劇の発表会を通して、相手意識をもって英語表現を聞いたり伝えたりしている。</td><td>【Activity】
学年発表会</td><td>○</td><td></td><td></td></tr>
</table>

４　本時の指導

（1） 本時の目標

本時の学習課題「見ている友だちにもっとよく伝わる劇にしよう」に対し、「自分たちの考えた劇が本当に伝わるかどうか不安に感じる子」や「見ている友だちが楽しんでもらえるように意気込む子」などの表れをするであろう子どもが、お互いに劇を見合ったり、自分たちの劇の改善点を話し合ったりする活動を通して、よりわかりやすく伝えるための表現方法に気づくとともに、表現することのおもしろさを感じ、よりよい劇を目指し、積極的に伝えようとする。

（2） 授業構想

まず、いつも通りの挨拶で始める。列ごとに前の人が後ろの人に挨拶をしていき、子どもたちの中で、これから外国語を使ったコミュニケーションを学ぶ雰囲気を高めていく。

続く Let's Chant では、英語ノート１と Hi,friends2 の中から、子どもたちの劇の中で使用されている表現を含んだチャンツを選び、言い慣れることを図っていく。

そして、本時の課題、【見ている友だちにもっとよく伝わる劇にしよう】を子どもたちに伝え、劇を見合う活動に入る。子どもたちには、前もって本時でお互いに劇を見合うことを伝えており、本時に向けて準備をしてきた。本時は準備をしてきたオリジナルの劇を初めて披露する場である。また、学年で行う発表会に向けて、学級内で高め合うことをねらいとした場でもある。子どもたちには、自分たちが苦労を重ね、考えてきた劇を表現することへの意欲の高まりと共に、見る側になった際にも、学級の仲間の劇を改善するために、気付いたことを積極的に伝え合う姿を期待したい。劇は２つの会場に分け、３つのグループでお互いに見合う。劇を見合う前には、声の大きさ、ジェスチャー、表情など劇のポイントとなることを押さえておく。

劇終了後、まず、あらすじがしっかりと伝わったかどうかを確認する。見ていた子どもが、口頭でできるだけ詳しくあらすじを伝え、劇をしたグループはワークシート(あらかじめ、あらすじを書いておいた紙)を見ながら、伝わったかどうかを確認する。伝わっていなかった場合は、どうしたら伝わるようになるのかなど、子どもたちに投げかけ、深めていく。その後、あらすじ以外の劇に関する意見などを交流する。その際、劇をする前に確認したポイントを想起させ、活性化を図りたい。劇をしたグループの一人は、ワークシートに出た意見を記入しておき、次の改善を図る活動の際に、確認できるようにしておく。HRT と ALT はそれぞれの会場に必ずつくようにする。劇のポイントを上手に演じることができた子どもを大いに褒め、表情やジェスチャーに対する意識を高めていく。また、劇終了後の意見交流時などを中心に、子どもたちに積極的に働きかけ、高め合う活動を充実させていく。改善点、良くなかった点に意見が集まってしまいがちになることが予想されるが、良かった点にも目を向けさせ、子どもたち同士で良さを認め合うことも大切にしていきたい。

その後の、「劇を改善しよう」では、劇を見た友だちの意見や他のグループの参考点などをもとに改善を図っていく。劇を見た友だちの意見は、記入しておいたワークシートを確認する。あらすじがうまく伝わっていなかったところは、話し合いでの意見を参考にしたり、改めて自分たちのグループで考え、文を追加したり、ジェスチャーや表情を改善したりすることによって、解決を図る。また、セリフをうまく伝えることができなかったなど個人的な課題をもつこととなった子どもは、グループ内で英語表現を再確認し、何度も練習することで改善を図っていく。HRT や ALT は、劇を見合う際に支援を要すると感じたグループを中心に見て回り、アドバイスをしていく。劇のポイントを押さえた改善を図っているグループは取り上げ、全体に広げていく。また、これまでの外国語活動の様子から支援を要するであろう C さんや D さんには、がんばった点は大いに褒め、上手くいかなかった点は励まし、意欲が継続するようにする。またグループでの活動の際に支援することにより、グループ内でも、互いに励まし合い、認め合える雰囲気を作っていく。発表会までの時間も限られているため、口頭で話し合うだけではなく、実際に劇をしながら確認していくように声掛けをしていく。

最後に、本時の振り返りをする。発表会に向けてグループ内で励まし合い、認め合えるためにも、振り返りの時間は十分にとるようにする。「今日、どのような思いで、初めて劇を披露しましたか。」や「友だちの意見で、とても参考になった意見はどのような意見でしたか。」など、本時の目標にせまる言葉かけをしていく。また、不安に感じている点などがあったら、書いておくよう声掛けもしていく。大体の子どもが書き終わったら、終わりの挨拶をする。

（3） 本時の視点 （手だて２ 授業実践 ～表現力を育むための手だて～）

表現したくなるような場の設定 もっとよく伝わる劇にするために学級内で劇を見合う場を設定したことが、子どもたちの意欲を高め、より豊かな表現力を育む場として機能していたか。